

国際シンポジウム一
『講演録』国語科教育と神話・伝承

吉永 安里

一人目の発題者ということで緊張しておりますが、私からスタートするのはきっと意味があるのだろうな、と思っております。プロフィールが資料の冒頭に書いてあるということでしたので、自分のプロフィールを紹介しながら話を進めていけたらと思つております。

まず私からは、国語科教育と神話・伝承がどのような扱いになつてているか、ということをお話しいたします。

まず、なぜ私が……ということなんですかけれども、今回のお話しがあつたときに、『古事記』の専門ではないし、こんな所でお話をさせていただくようなことは……って話をしていたんです。けれども、「是非、小学校の教員を経験したという立場から話を」ということでしたので、そのあたりに焦点化をしてお話します。

皆様のお手元にはうつすら灰色で文字が出ていると思いますが、三つの柱立てで、まず小学校の国語科教育と神話・伝承がどのような扱いになつているかということをお話しさせていただきました後に、子どもたちがどのように『いなばのしろうさぎ』の話を読んでいるかということを、いくつかの実践例をもとにお話しをしたいと思っています。また、神話・伝承の教材化にあたつては、なかなか難しい課題がつきまとつているかなと思いますので、そのあたりも触れてていきます。

どうぞよろしくお願ひします。

ではまず、小学校の国語科における神話・伝承の扱いですが、もともとは平成二十年度に小学校の学習指導要領が改訂になりましたして、その際に戦後初の扱いで神話と伝承の教材が教科書の中に載るようになりました。その時の扱いとしては、伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項という中に載っておりました。

この時の小学校学習指導要領の国語科には、三つの領域、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という三つの領域に加えて、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が、一事項入っていました。

その中に、指導すべき事項として、「伝統的な言語文化に関する事項」が、「言葉の特徴や決まりに関する事項」、「文字に関する事項」と「書写」の四つの扱いの中のひとつとして入ってきたわけです。

実際にどここの学年で取り扱われるかということですが、これも大事な問題です。神話をどういうふうに伝えていくかということを考えた時に、どれくらいの年齢の人に、どのような形で、ということを考えていく必要があるからです。日本の小学校では一年生と二年生で、伝統的な言語文化の中に、昔話や神話・伝承などの本や読み聞かせを聞いたり発表しあつたりすること、というような形で載ることになりました。

そもそも、神話・伝承がどのように学習指導要領の中で規定されているのかと申しますと、皆様のお手元にある資料の四枚目のスライドのところですが、神話・伝承というのは一般的には、特定の人や場所、自然、出来事と結び付けられて伝説的に語られている物語、と書かれています。

さらに、児童の発達段階や、初めて古典を学習するということを考慮して、やさしく書き換えたものを取り上げる、ということがここでは言われているわけですので、子供の発達に合っているかということはやはり非常に重要な問題です。

これがまた平成二十九年度に改訂になりまして、小学校は令和二年度全面実施ということになりますが、内容の構成が多少変わりました。

「我が国の言語文化に関する事項」というところに今回、神話・伝承が入りました。これも小学校の先生や教育に携わっている方はご存知かと思いますが、先ほどのところとちょっと構造が変わりまして、「学力の三要素」と言われる、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力等」と、あとは「学びに向かう力、人間性等」と、この三つの柱がある中で、国語が「知識および技能」と「思考力、判断力、表現力等」と二つに分かれまして、話すこと、聞くこと、書くこと、読むことという三領域は「思考力、判断力、表現力等」に入り、「伝統的な言語文化」は「知識および技能」に入りました。「我が国の言語文化に関する事項」の中の、「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」、それから「書写」と「読み書き」の四つの柱立ての中の一つの扱いになっています。

伝統的な言語文化の扱いとしては、我が国の言語文化に触れるということ、それから、それに親しんだり楽しんだりするとともに、その豊かさに気付くこと、また、理解を深めることというのは、今回、知識および理解のところに入りましたので、理解を深めることにも重点が置かれています。

一年生、二年生のところがどのような表記になつたかと申しますと、昔話や神話、伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむというものが今回のねらいとなっています。

では、こうした小学校学習指導要領における位置づけの中で、学校で子どもたちがどのように『いなばのしろうさぎ』の話を読んでいるのかというところを皆さんにご紹介します。まず、一つ目ですが、東京学芸大学附属小金井小学校の二年生の子どもたちの『いなばのしろうさぎ』の実践事例です。ビデオを流しますので、しばらくそちらをご

覧ください。

まず、この実践では、今ちょうど写真で子どもたちがお話を立つて読んでいる様子が見えるかと思うのですが、担任の大塚教諭（現・文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）のご実践では、先生がお話を子どもたちに読んで聞かせて、それについて子どもたちが感想交流をした後に、群読をする活動が続いていきます。冒頭の読み聞かせと感想の交流のところをご覧ください。

* * *

（大塚教諭）みんなに読みますので、どんな話かなというのを頭で描いてください。後でどんな話だったか聞きたい。
いなばのしろうさぎ。大国主はたくさんの神様の兄弟たちと出雲の国に住んでいました。ある日、兄弟たちは大国主にたくさんの荷物を背負わせ、いなばの海に出掛けました。海岸に着くと、毛のないうさぎが震えて泣いていました。

泣いていました。どんな会話になるでしょうか。

泣き声がうるさかつたので、神様たちは「海の水を浴びて風に吹かれて寝ていれば治るよ」と言つて、うさぎを追いやりました。

取りあえず、あっちへ行け。

うさぎは神様たちに言われたとおりに寝ていると、海の水が乾いてきて風に当たると毛のない皮がひび割れてしましました。うさぎはあまりにも痛いので、苦しんで泣いていました。

どんな様子、どんな感じ、どんなうさぎさん今、頭にある。

後から重い荷物を背負った大国主がやつて来ました。「うさぎくん、どうして泣いているのですか」と大国主が尋ねると、うさぎはこう話し始めました。「僕は隠岐の島に住んでいるうさぎです」。向こう側の海の反対側の島に住んでいるうさぎです。「いなばの国に行きたかったんですが、海を渡る方法がありませんでした。するといい考えが浮かびました。僕はワニザメくんに言いました」。

ワニザメくんつて何だつけ。

「この島にいる僕たちうさぎと海にいる君たちワニザメくんたちと、どちらがたくさんいるか、比べっこしようよ。ワニザメくんは、一体、どうやって数えるんだいと言いました。ワニザメくんはみんなを連れてきて、海の間に並んでくれるかな。そうしたら僕がその上を飛びながら数える。なるほど、面白い。やってみよう」。

ワニザメくんたちが集まってきて、島から海岸まで一列に並びました。

どんな様子。一列に並んでいるんだ。

「僕はじめのワニザメくんの背中にぴょんと乗って、ひとつ、ぴょんと乗ってふた一つ、ぴょんと乗って三つと数えながら、ぴょんぴょんぴょんと海岸のほうへ渡っていきました。あと少しで渡り切るというところで叫びました。君たちは僕にだまされたのさ。叫んだ途端、最後のワニザメくんが怒って、僕を捕まえて、毛をむしり取つてしまつたのです」。

大国主はその話を聞いて言いました。「すぐに川の水で体を洗い、ガマの花を取つてきて敷き詰めて、その上をごろごろと転がれば、きっと元の体に戻るでしょう」。うさぎは教えられたおりにやつてみると、見る見るうちに元

の姿に戻りました。

これが『いなばのしろうさぎ』です。というお話。知っていた？ どんなことを感じましたか。タナカくん。^{*}
(タナカ) しろうさぎは毛が刈れちゃつたからかわいそعدだなと思いました。

* * *

という感じで、子どもたちに読んで聞かせた後に、子どもたちの感想を出すということをしていました。感想に関しては、皆さんのお手元に今、一覧でまとめてありますので、そちらを見ていただいて、またこの後、もう一本ビデオを見ていただいてお話ししたいと思います。

この後、子どもたちは感想交流した後に、群読をするということで、そこにせりふを付け足して読んでいくということをしていました。最終的に、発表会というわけではなくて、一時間の授業の中で、この後、群読をみんなでやつていくための練習をしてみようという形で、正式な形の発表会はないんですけど、みんなで読み合っている姿です。

* * *

ワニザメくんたちは集まつてきて島から海岸まで一列に並びました。じやぶじやぶじやぶ。僕は、はじめのワニザ

メくんの背中にぴょんとひと一つ、さあて、ぴょんと乗つてふた一つ、ぴょんと乗つて三一つ、そう数えながらぴょんぴょんぴょんと海岸のところまで渡つていきました。あと少しで渡り切るところで叫びました。君たちは僕にだまされたんだ。叫んだ途端、最後のワニザメくんが怒つて、僕を捕まえて、毛をむしり取つてしまつたのです。わいわいわい。

大国主はその話を聞いて言いました。すぐに川の水で体を洗い、ガマの花を取つてきて敷き詰め、その上をころころと転げば、きっと元の体に戻るでしょう。

うさぎは教えられたとおりにやつてみると、見る見るうちに元の姿に戻りました。ああ、よかったです。大国主さん、ありがとうございます。

これが『いなばのしろうさぎ』です。

* * *

という実践の流れになつてゐるんですけども、先生は、子どもたちが楽しんで読めるように、うさぎがワニザメの背中を跳んでいくところを、跳んで一つ、とリズミカルになるようにリライトしたということでした。

実際に、どんなことを子どもたちが感想として持つたかということなんですが、しろうさぎに関することは子どもたちからたくさん出ておりまして、しろうさぎが毛が刈られてかわいそうだったとか、かわいそうだけども、だましたのが悪いとか、あるいはしろうさぎはすぐくずる賢いなどか、でも、最後にばらしちゃつたのは正直なんじやない。

いかという感想がありました。あと、大国主のことについての言及、あるいはワニザメというのは一体どんな生き物なんだろうという感想もありました。

今回の場合、挿絵のある話ではなくて、先生が読んで聞かせていくので、子どもたちはそこにどんな生き物のかなと興味をもつたり、あるいは子どもらしいと思うんですけれども、うさぎが渡つているときにワニザメの頭でたんこぶができるちやつたんじやないかなという感想をもつたりしていました。非常に本質に触れるようですがれども、なぜうさぎはワニザメを選んだのかという感想も子どもたちから出ていました。子どもたちは『いなばのしろうさぎ』に対して、こんなふうに率直な、最初に聞いた感想をもつことがあるということで、皆さんに知つておいていただけるといいかなと思います。

最後に、神話・伝承を教材化するに当たって、今の大塚先生のご実践でもあつたかと思うんですけども、子どもたちにどういうお話を聞かせたらいいか、というところはかなり難しい問題なんじやないかと思つています。まず、一、二年生での扱い、先ほど申し上げましたけれど、その問題がありますので、一、二年生の子どもたちの発達に合つていてるかどうかというところを検討する必要があります。いろいろ分け方はあるかと思いますが、三つに分けて考えてみたいと思つています。

まず、『古事記』の深いご研究は原田先生とかシャロンドン先生がお詳しいので、また後ほどお話があるかと思うんですけれども、お話の構造に幾つかパターンがあります。

また二つ目、どのような内容を扱つてあるかというところもありますし、どのように表現をするかということでも、子ども向けてどう表現するのか、どのように配慮する必要があつたのかということを検討する必要があるという

ことです。

まず、一つ目の構造から考えると、お話にはいろいろな構造があるわけですが、まず、最初に登場する人物は誰なのかということについてです。この時期の子どもたちにとっては、最初に出てくる人物というのは子どもたちに印象に残りやすいということと、視点人物には、子どもたちはそこに同一化して読んでいくので、そこにどうしても感情移入をして読んでいくというところがあります。

そういう点で、例えば三省堂のものだと、うさぎが最初に出てきますし、東京書籍は大国主命が出てきますし、教育出版や光村図書では、八十人の兄弟の神様というのが最初に出てくるところがあつて、これが誰のお話なのかとうのを一年生の子どもたちがどう捉えていくかというところは、最初に登場する人物というのがかなり大きく影響するのではないかと思っています。

二つ目はその内容についてです。これもいろいろな取り扱いがあつて、一年生の子どもたちにどのような内容を扱うのが適切なのかということがあるので、教科書会社によって載せる部分と載せない部分があるというのがあります。例えば、大国主とうさぎがどうして出会ったのかというところで、八十人の神様が何の目的でその辺を歩いているかというところが、ヤカミヒメというお姫さまに結婚を申し込むためと言及されているものは東京書籍と光村図書です。そうではない場合には、目的があつてということではなくて、たまたまそこにうさぎがいて、神様と出会うことになり、子どもたちには違うお話に取れるんじゃないかなと思いますし、これは始まりだけでなく、終わり方についても言えます。

子どもたちはお話の一番重要なポイントというのは、文末、文章の最後にあると捉える傾向がありますので、ここ

△| 国學院大學

神話・伝承の教材化にかかる課題

教材化にあたっての工夫と難しさ

→小学校1・2年生の発達にあつては。

②内容

例1) 大国主とうさぎの出会い

やがみひめ（東京書籍）
おひめさま（光村図書）

例2) 終わり方

—これがいなばのしろうさぎです（教育出版）
オオクニヌシノミコトにお礼を言う（三省堂）
オオクニヌシは優れた人物であると世に伝わる（光村図書）
やがみひめとの結婚の予言、国を治める（東京書籍）



にお話のテーマを感じることも多いです。そのときに、例えば教育出版は、今見ていただいた実践の最後、「これが『いなばのしろうさぎ』です」となつていまるので、これは『いなばのしろうさぎ』という一つの完結したお話と子どもたちは捉えます。あるいは、最後、大国主命にお礼を言うとか、あるいは大国主は優れた人物であると世にこの後、伝わつていきましたとかいう結末の場合、英雄譚として伝わりますし、ヤカミヒメと結婚して、国を治めることになりますという場合は、この後も続きがあることを予感させます。

話完結なのか、それとも続いているお話の中の一つであり、この先にまた何か物語があるということを期待させるのかなど、書きぶりが子どもたちの読みに影響を与えるのではないかと考えられます。

そして三つ目の表現の部分ですけれども、このお話では、ワニザメと言つていましたが、ワニザメと言うと、ワニのようなサメを想像させますよね、日本語の構造から言えば。私は今、子ども支援学科という、幼稚園と保育士の資格を取る学生たちのところで教えてているんですが、今回の古事記学のシンポジウムで『いなばのしろうさぎ』の話をするといったら、幼稚園経験のある同僚は、「ワニザメが出てくる話ですね」と言つていました。ですから、幼稚園で読まれることの多い絵本の『いなばのしろうさぎ』ではワニザメと書かれているものが多いのかなと思いますが、教科書の場合には、教育出版と光村図書はワニと書いてあり

まして、東京書籍と三省堂に関してはサメと書かれています。

元々の原文ではワニになつているかと思うんですけども、絵のない原文では読み手に想像させるということでもくとも、絵本、あるいは教科書のように挿絵の入つたものでは、どう本文で表記するかは大きな問題になります。ワニと書いてあつて、サメの絵が描いてあつたら、子どもの経験や知識からしたら非常に大きな矛盾ですよね。それもあつて、サメと表記を替えて、サメの絵が描いてある教科書もあるわけです。

また、うさぎに関しましても、しろうさぎの「しろ」の表記が白と描いてあるものと、ひらがなで「しろ」と書いてあるものがあつて、これも裸になつてしまつた素という字でシロうさぎと書く説もありますので、教育出版ではひらがなの「しろ」として、色が白ということではないことをニュアンスとして含む表記にしていました。

また、人物像の描き方では、兄弟の神様に対する人物描写も非常に意地悪なバーソナリティーとしてそこが強調されているものや、大国主の人物像が兄弟の人物像に対比されて、非常に優れた優しい人物であり、知識人であるといふことが書かれているものもあります。あるいは、うさぎがこれも非常にずる賢いうさぎなのか、絵本によつては、かわいそうなうさぎとして描かれて、そこが強調されている場合もあります。そのように、人物の描き方によつても、子どもたちのストーリーの捉え方というのは変わつてくるのではないかということです。

これがちょうど先ほど申し上げたワニかサメかというところなんですが、ワニと書かれている場合の挿絵を見ると、どういう生き物か分からぬようなぼやかした挿絵の描き方をしています。サメと書いてある場合には、ワニは完全にサメの形で描いてあるのが分かるかと思うんですが、その辺り、教科書会社は非常に苦心しながら挿絵を入れているということかと思います。つまり、本文をワニにするんだつたら、サメを描けないとところなのかなと思

います。

光村図書の場合には、ワニと書いてあり、挿絵は一切描いてない形で載っていますので、子どもたちが想像を広げて読むことができるようになっています。これも挿絵のバージョンが替わってはいるんですけれども、一時、このようなものも出されていました。

この辺りのことをうまく実践に生かしている一例として、大塚教諭と同じ東京学芸大学附属小金井小学校で教えていた細川教諭（現・東京学芸大学准教授）から実践を借りてきましたので、それを紹介したいと思います。お手元の資料、指導案がかなり小さくて見えにくいくらいですが、インターネット上からもアクセスできますので、ご興味のある方はそちらを見ていただけたらと思います。

音読劇をするという言語活動を目標にして、子どもたちが『いなばのしろうさぎ』を読んでいく実践です。音読劇のためのお面を子どもたちが作る言語活動を組み込むことで、子どもたちがワニと書いてあるものをどのように絵として表現するかということをテキストと向き合いつかけにしているということです。下書きのお面を見ながら、みんなでワニというのは一体どんな生き物なんだろうということを読んで、別に結論が出るということを大事にしたというわけではなくて、いろいろお話を読み込みながら、子どもたちが、ワニというのは、日本にはワニはいないんじゃないかと経験や知識をもとにした意見を出したり、毛皮を剥ぎ取ったと書いてあるんだから、凶暴な海に住んでいる動物じゃないかという意見が出たりしたということを細川先生から伺いました。ねらいにしたのは、子どもたちが叙述をもとに、お話を想像して楽しむということだとおっしゃっていました。

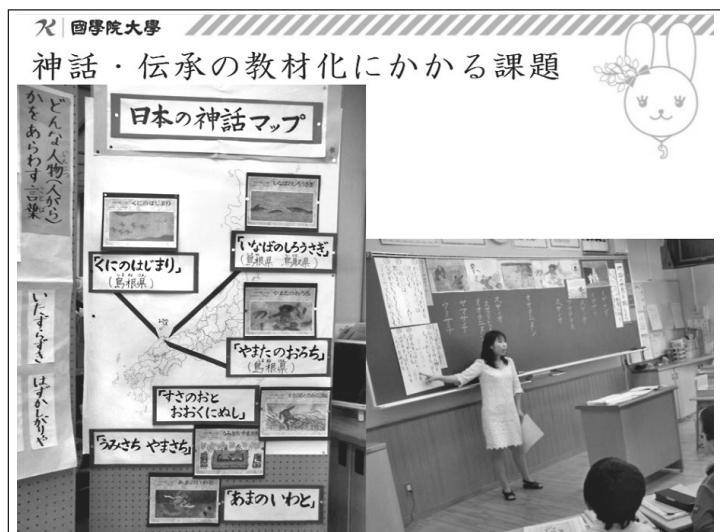
また今、言語活動の話をしたんですけども、小学校以上の国語の学習では、子どもたちがただお話を読むという

ことではなくて、主体的に言葉を用いて学習するとのできる活動を行ながら、その活動を通して資質能力を伸ばしていくということが大切にされていますが、この言語活動についても、一、二年生に合っているかどうかということを検討していかなければいけないことがあるかと思います。

例えば、言語活動の例として「読み聞かせ」が学習指導要領に載っていますが、子どもたちは乳幼児期からずっと親御さんや先生方の読み聞かせを聞いて育つてきていますので、先ほどの大塚教諭のご実践を見ても分かったかと思うんですけど、非常によく聞いています、集中して。読み聞かせはそういう意味で一、二年生の子どもたちに適した言語活動だと思いますし、さらに自分たちでそれを表現してみたいという気持ちがたくさんありますので、群読を楽しんだり、あるいは紙芝居を作成したり、ペープサーツと呼ばれる紙人形を作つて演じたり、あるいは細川教諭がなさいていたようなお面を作つて音読劇をするということを楽しみながらお話に触れていくことができるのかなと思います。

また、言語活動では並行読書と呼ばれる活動もありまして、みんなで共通の教材を読むだけではなく、それ以外にもそれぞれの子どもたちが関心を持ったお話に興味を広げながら、他のお話を読んでいくという扱いをしたり、別の本を読みながら、そこから違いを見つけていく比べ読みをしたりという活動例もあります。ただ、並行読書は一、二年生にもある程度できると思うのですが、比べ読みの場合には五、六年生の言語活動例として挙げられることが多く、一、二年生には多少難しいところがあるのではないかとも思います。ただ、そうした言語活動も含みながら、ご実践されているものがありましたので、紹介させていただきます。

千代田区立昌平小学校に当時お勤めになつていていた酒見教諭（現・福生市教育委員会総括指導主事）のご実践です。



これはある単元の中で子どもたちが神話のお話をたくさん触れられるようについてことをねらいとしたものです。共通課題としては『いなばのしろうさぎ』を読み、それ以外にもいろいろな絵本を先生が用意をされて、それを読みながら、お気に入りの登場人物を見つけるという言語活動をしています。写真としてはこんな感じで、いろいろな日本の神話に関する絵本を子どもたちと一緒に読んでいきながら、これがどういう場所で起こったお話なのかということを神話のマップにしたりですか、どんな人物が出てくるのかということを先生がいろいろなお話の登場人物を紹介したりということをしています。こんな感じで、子どもたちは自分のお気に入りの登場人物を、絵本の読み聞かせをしながらお友達に紹介していくいます。これは、子どもたちが自分の紹介したい人物の絵と、どんなところがお勧めなのかということを文章にして書いたものです。

また、この実践の続きとして、自分のお気に入りの登場人物が出てくる別の、例えば『いなばのしろうさぎ』も幾つかバージョンが出ていてますので、それと読み比べながら、どのような書き方の違いがあるのかということを考えてみたそうです。それに関しては、先ほど申し上げたように一、二年生の子どもたちには少し難しいかなと思いますが、酒見教諭は登場人物の性格の比較を子どもたちができる範囲で取り組まれたとおっしゃっていました。



国学院大學

これは自分のお気に入りの人物を子どもたちが紙人形にして紹介をして、どんな性格なのかを友達に紹介している場面です。こんなふうにしながら、音読や、あるいはこうやって紙人形を作つて遊ぶことを言語活動として取り入るながら、楽しく神話に触れているということを今、一、二年生の先生方が工夫をされているということです。

ご清聴ありがとうございました。私の話はここまでにしたいんですが、最後に三枚ほど写真を載せました。これは

私が大学で、幼稚園教諭と保育士の資格を取ろうとしている学生たちと、『いなばのしろうさぎ』と『ヤマタノオロチ』についての授業を行つたものです。教科書でどのようにこの二つの話が取り扱われているかを学修した後、どちらかを自分たちで選んで、幼児期の子どもたちにそれをお話しするのにどんなふうに伝えていくかということを学生たちに考えてもらつた時の写真です。

一番上は『いなばのしろうさぎ』をオペレッタにしたもので、これがサメ、ワニです。ピアノを弾いている子がいて、歌を付けながらお話を展開して、うさぎがこんな感じでアクロバットを取り入れながらやつていました。あるいは紙人形劇で紹介したグループもありましたし、一番下が『ヤマタノオロチ』なんですかれども、影絵で表現したものもありました。『ヤマタノオロチ』のちょっとおどろおどろしい神話にはこういう表現の仕方も合つていてるなと思いましたので、最後に紹介させて

いただきました。

私の話はこれで終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

注記

* 本講演録では、個人情報保護の観点から児童の氏名は仮称としています。